

編集後記

今回は、“押しの美学”と“引きの技”について考えたい。

と、高尚な気持ちで書き出してみたが、何のことはない。今号の特集テーマである「HDD (Horizontal Directional Drilling) 工法」の普及が、我が国では欧米諸国と比べ芳しくない。そこには何か日本特有の事情があるのか、考えてみたかったのだ。

HDD工法は、読んで字の如く、方向制御しつつ水平方向に地中を穿掘する手法だ。我が国ではこれを「誘導式水平ドリル工法」と呼んでいる。この工法は二工程に分けられる。第一工程で、ドリルヘッドの位置を地上からロケータで探知、方向制御しつつロッドを継ぎ足し削孔する。第二工程で、到達したロッドの先端に拡張装置（リーマ）と本設のPE管を接続し、発進側へ引き込む。管の埋設位置をドリルとロッドが掘進し、帰りに本来の管を引き連れてくるという、合理的な手法だ。欧米での実績は多く、“非開削手法”と言えば、まず“HDD”を思い浮

かべる人が多い。しかし我が国では、ガス事業界以外でこれを知る者は少ない。このギャップは何なのか。

よく言われる理由として、水道事業では、PE管の長期使用における飲料水の安全性への懸念が、下水道事業では、従来の円弧推進のイメージから、その施工精度への不信がある。しかし、今日のPE管の性状やHDD施工技術を十分に精査し、確信できる評価をすれば、問題ないことだ。では、技術的な理由でなかったら何故なのか。そこには日本人の心理的一面も介在するのでは、と穿った見方をしてみたくもなる。

日本人の心理に、“引き”より“押し”を好む、“引くこと”より“押すこと”を善しとする傾向はないだろうか。「ここは押しの一手法」「堂々とした押し出し」など。大相撲でも、引き技は決して推奨されない。“引き落とし”で横綱が勝っても、まず褒めてはもらえない。まして、引いて相手に押し込まれ、土俵を割ろうものなら、「あそこでの引きはいけません。横綱らしくない。あれが敗因

です。」になる。日本人は、前へ直向に押す姿に、堂々とした正のイメージを持つようだ。たとえ困難でもひたすら前に押し出す姿に“押しの美学”を見る。一方、「引退」「引き延ばし」など、どうも“引き”には、前向きでない負のイメージが纏わるようだ。

しかし、柔道はどうだ。押し引き自在、“引き”が評価される。技術の世界も然り。熟練した職人の鉋掛けなどは、“引き技”の芸術と言っている。

今日、推進工法などの非開削手法は、環境に優しい手法として、社会から高い評価を受けている。その中で、欧米諸国では非開削の代表とされるHDD工法が、我が国で低迷している現状を、「そんなことでいいのか!」と言う者は、誰かいらないのか。

科学技術の進展した今日、社会に有用、有効な技術は、本来の評価軸に正しく置き、その実力を正しく評価することにより活かされ、社会に貢献する技術となり得ると考えるが、如何か。

〈編集委員長 石川和秀〉



No.54 2006 Jan. 平成18年1月1日発行

編集:「No-Dig Today」編集委員会
編集企画小委員会

発行所:日本非開削技術協会

〒107-0052 東京都港区赤坂1-6-14

赤坂協和ビル3F

TEL.03(3586)5181 FAX.03(3586)5183

発行人:松井大悟

印刷所:株式会社 LSプランニング

● ご案内 ●

◇本誌のご購読について

ご購読をご希望の方は、巻末の振込み用紙で当協会まで直接お申し込み下さい。

○購読料(税込み)

1冊 1,500円(本体1,429円)〒400円

1ヵ年(4冊)6,000円(本体5,716円)〒1,600円

◇発行

年4冊:1・4・7・10月1日発行

◇広告のお申し込みについて

本誌に広告の掲載をご希望の方は、編集室までご連絡下さい。媒体資料等お送り致します。

◇投稿

・技術論文

非開削に関連する技術、製品についての論文を募集しています。

投稿論文は、委員会にて選考の上掲載論文には薄謝をお送り致します。

◇情報のご提供について

・No-Dig NEWS ダイジェスト

非開削技術に関連する新技術、新製品、図書の紹介、関連団体の動向や講演会、セミナー・展示会の案内など、情報をお寄せ下さい。